# 絶滅に瀕するチンパンジーの飼育下繁殖の取り組み

## －社会交渉から予測する将来の育児能力の研究－

（公財）横浜市緑の協会よこはま動物園　野口忠孝

チンパンジー（*Pan troglodytes*）はIUCN（世界自然保護連合）が定める絶滅危惧種であり、日本は320個体を国内で飼育する世界第2位のチンパンジー保有国である。絶滅危惧種の飼育下繁殖はその種の生息域外保全と直結し、動物園は飼育チンパンジー個体群の安定維持に応分の責任を果たすことが求められている。またアフリカの赤道周辺、熱帯林から乾燥疎開林にのみ野生チンパンジーは生息する。横浜市は2008年と2013年に、第4／第5回アフリカ開発会議の開催都市としてこれら生息地域国の人々を迎えた。2008年からはJICA（国際協力機構）と連携してウガンダ野生生物教育センターにチンパンジーを含む野生動物の飼育について技術供与をおこない、スタッフが双方の施設を毎年訪問するなど縁が深い。こうした背景からよこはま動物園では、チンパンジーを大人のオスとメスが複数同居する「複雄複雌」という野生と同じ社会構造で飼育し、種の保存に役立てるための繁殖に関する研究をおこなってきた。「子はかすがい」というように、ヒトの家族は子供の存在が父母の関係維持に重要な役割を果たす。本研究では、ヒトに最も近縁なチンパンジーにおいて、ただしヒトのような家族という集団単位を持たないヒト以外の動物で、子供の誕生とその発達が大人の社会交渉、特に同居する母親以外の大人どうしの関係におよぼす影響について調べた。社会交渉の方向性に着目すると、子供の誕生を機にオスもメスも社会交渉が著しく増加し、行動に明瞭な変化が現れた。こうした変化には個体差が見られ、違いに注目することで、出産経験のないメスが交尾・出産し、適切に育児ができるかどうかを予測するのに役立つことが明らかになってきた。今回の結果にもとづき、子供の抱擁、毛繕い、遊ぶなどの社会交渉が著しく増大した未経産の大人メス「ヨシズ」を次期繁殖候補に選び、初めての繁殖に取り組んでいる。